現代社会研究会学習会

【空想より科学へ】（エンゲルス著）英語版への序文（後半）

2009/12/18 平岡聡史

ブルジョアジーは封建的組織の内部において既に一定の地位を持っていたが、彼らの膨張力にとってはあまりにも狭くなっていた　→　封建制度の崩壊を目指す

・封建制度

中心はローマのカトリック教会

→「ヨーロッパの全体を一大組織に統一」「カトリック世界の領土の優に３分の１を領有」　←　教会組織の破壊が必要

・科学

「工業生産の発展のために…科学を必要とした」

←「信仰によって定められた限界」が足枷となっていた

三大決戦

① 宗教改革

・ドイツの宗教改革

地方の諸候と中央権力の争いに退化

「（ルターの生み出したプロテスタントは）絶対王政に適合した宗教」

・カルヴィンの宗教改革

予定説「商業世界は競争で、そこでの成敗は個人の働きや智力にはよらない、彼自身の制御しえない諸事情によるという事実を、宗教的に表現」

←当時の社会情勢（旧来の商業上の通路や中心の更新、インドやアメリカの解放、金銀の価値の崩壊）

→オランダの共和国化、イギリスの共和党樹立

② 名誉革命

バラ戦争により貴族の中心が旧来の封建諸候からブルジョア的風習を持つ集団へと推移

ヘンリー８世による土地整理　→　大量のブルジョア新地主の発生

イギリス新貴族はブルジョアと結託して利益を求める

→「新興中流階級と旧来の封建大地主との妥協」

→「ブルジョアジーは…公認されたイギリス支配階級の一構成分子となった」

・宗教を利用した理由Ⅰ：「下層階級たる生産的国民大衆を抑圧する」ため

「宗教が…神が彼らの上に与えたもうた主人の命令を従順に聞かしめる働きをもっている」　←　「服従の訓練」

・宗教を利用した理由Ⅱ：唯物論の隠蔽

「イギリスにおける唯物論の勃興」　⇔　唯物論の宗教異端性、反ブルジョア的

→唯物論は「現世の学者や教養のある人士にしか適さない」「宗教は大衆に…適当である」と国民に啓蒙（ホッブスら）

唯物論はフランスに渡り、デカルト派の一派と出会う

→フランスでは「(唯物論の）革命的性質が正体をあらわした」

→フランス革命における「共和主義者やテロリストの理論的旗幟となり、人権宣言のテキストに用いられた」

③フランス革命

「宗教の外套を全く脱いで、装飾の無い政治的地盤の上で戦い抜かれたものとしては、最初の蜂起」「ブルジョアジーが完全に勝利」

「イギリスでは…法律の封建的諸形態が宗教的に保存されている」（古代ゲルマンの個人の自由を尊重するという最善の部分を、久しきに渡って保存している。例えば地方自治、たとえば法廷の独立）

⇔「フランスでは…過去の伝統との完全な絶縁…封建制度の最後の痕跡をも一掃」

イギリスのフランス革命への反発

←1．フランスの植民地を併合し、海上競争に勝つため

←2．貴族なきブルジョアのみの社会への恐怖

→「イギリスのブルジョアは、いよいよ強く彼らの宗教にしがみ付いた」

フランスではフランス革命により「ブルジョアジーの政治的勝利を確立した」

⇔イギリスでは産業革命により、「経済力の中心を（貴族からブルジョアジーに）完全に移動させた」

→ブルジョアジーが経済力を持つにつれて、徐々に勢力が逆転していった

（選挙改正案、穀物条例）

「産業革命は多数の工業資本家という一つの階級を作り出したが、それはまた、遥かにより多数の工業労働者という階級をも作り出した。」

→産業革命の進展に比例して、数を増す

→「労働者の政党」（チャーティスト党）を結成

3 月革命、チャーティストの敗北、パリ労働者の氾濫の大敗北、伊牙南独の惨事、ナポレオンのパリ征服

→「労働者階級の要求というお化けは退治された」

→ブルジョアジーはますます民衆を宗教的気分に浸しておく必要性を痛感

→下層社会への福音伝道、ブラザー・ジョナサンへの援助請求、宗教復興運動、救世軍の受け入れ

フランスの歴史を見る限り、ブルジョア支配の独占は長くは続かない

政府の枢要の地位になるために必要な教養は貴族にしかなかった

←ブルジョアジーが貴族に妥協する理由

「人民憲章の大半を、やむなく、イギリス王国の法令中に取り入れてきた」

→「いよいよ以って、人民を道徳的手段によって制御するしかなかった。」

→更なる宗教復活運動

⇔仏独では労働者が社会主義に感染してくる

←ブルジョアジーは自ら宗教の尊重を演出するようになったが、時すでに遅し

「伝統は偉大な阻止力であり、歴史の惰力ではあるが、それは結局受動的なものであり、いずれは滅びるに決まっている。だから、宗教も資本主義社会を永久に守る防壁ではない」

→動きは遅々としているが、イギリスにおいても労働運動は進んでいる

独仏での労働者階級の運動はより進んでいる

→「ヨーロッパの労働者階級の勝利は、…英独仏の協力によってのみ確保されうる。」

・ エンゲルス以降の欧米の歴史的過程において、社会主義はどのような変遷を辿ってきたのだろうか

・日本やアジアなどの国々の歴史との比較